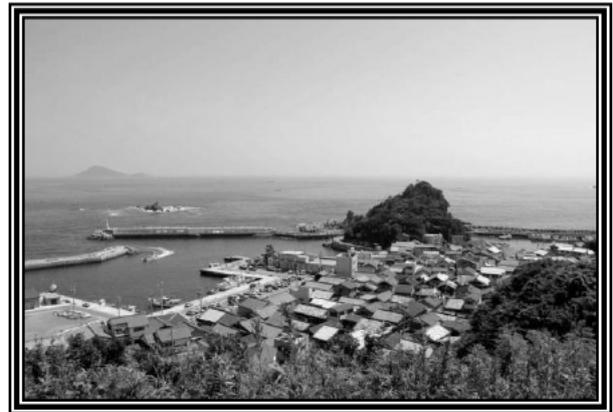
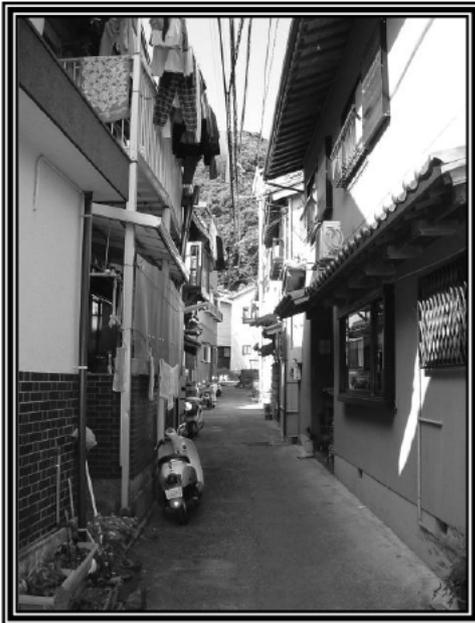


第1回 三重県 グリーン・ツーリズムネットワーク大会

報告書

～大会テーマ：暮らすように旅をする～



大会日程：平成24年10月16日（火）～17日（水）

開催場所：鳥羽市答志島 答志コミュニティアリーナ

主催：三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会実行委員会
三重県

後援：鳥羽市、鳥羽磯部漁業協同組合、答志島旅館組合、鳥羽市観光協会

目 次

大会宣言	2
大会の開催概要	3
プログラム	4
オリエンテーション	5
体験プログラム	
①答志島路地裏案内	6
②オリジナル漁具作成～海で生きるということ～	9
市場見学	12
基調講演	13
パネルディスカッション	14
アンケート結果、編集後記	16

第1回三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会

大会宣言

今、我々は豊かな地域資源に恵まれ、歴史や文化にあふれる鳥羽市答志島につどい、「暮らすように旅をする」をテーマに、グリーン・ツーリズム実践者などの参加者同士が交流や連携を深めることを宣言します。

- 一、地域の価値を再発見し、グリーン・ツーリズム実践者同士をつなぐネットワークを広げます。
- 一、農山漁村の豊かな「暮らし文化」を再生し、様々な交流を通じてその価値を高めます。
- 一、次世代を担う子供たちが、「命」の尊さと「心」の豊かさを実感できるような取り組みを行います。
- 一、グリーン・ツーリズム商品の質を高め、収益向上を目指すとともに、地域のビジネスとしての発展を図ります。

平成24年10月16日

第1回三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会

実行委員会 TIC 山本 加奈子



大会の開催概要



テーマ 暮らすように旅をする

趣旨 平成22年11月に第9回全国グリーン・ツーリズムネットワーク岐阜・三重大会を開催し、全国の多くのグリーン・ツーリズム実践者と情報交換や議論を通して交流を深め、三重県の農山漁村資源の素晴らしさと、その資源を活かしたグリーン・ツーリズム魅力について再認識しました。

この度、多くの実践者との連携・交流をさらに深め、農山漁村の魅力を再発見するとともに、新たな魅力を県内外へ情報発信していく、三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会を開催します。

主催 三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会実行委員会
三重県

後援 鳥羽市
鳥羽磯部漁業協同組合
答志島旅館組合
鳥羽市観光協会

開催日 平成24年10月16日（火）～17日

開催場所 鳥羽市答志島
メイン会場：答志コミュニティアリーナ
体験プログラム：答志島各所
市場見学：答志集約市場

参加者 107名



プログラム (敬称略)

10月16日 (火)

13:00~13:30

オリエンテーション (答志コミュニティアリーナ)

主催者あいさつ 三重県農林水産部次長 福岡 重栄

来賓あいさつ 鳥羽市長 木田 久主一

大会宣言 T I C 山本 加奈子

13:30~16:00

体験プログラム (答志島内各地)

①答志島路地裏案内

②オリジナル漁具作成~海で生きるということ~

16:00~17:00

体験プログラムに関する意見交換&交流会 (答志コミュニティアリーナ)

18:00~20:00

交流会 (旅館 寿々波)

10月17日 (水)

10:00~10:45

市場見学 (答志集約市場)

11:15~12:30

基調講演 (答志コミュニティアリーナ)

講演者 郷土の家庭料理「ひまわり亭」代表 本田 節

演目「今そこにあるものが人をつなぎ、地域を活かす

~地域資源を活かしたまちづくり~」

12:30~13:15

昼食

13:15~14:30

パネルディスカッション

テーマ「三重県のグリーン・ツーリズムを振り返り、今後を考える」

コーディネーター 東洋大学社会学部教授 青木 辰司

パネリスト 郷土の家庭料理「ひまわり亭」代表 本田 節

新潟県妙高市役所農林課 丸山 裕治

リバーサイド茶倉理事長 山本 齊

T I C代表 中村 泰久

15:30

閉会のあいさつ T I C代表 中村 泰久

オリエンテーション

大会の開会にあたり、主催者を代表して、三重県農林水産部 福岡重栄次長からあいさつを行いました。続いて、来賓を代表して、鳥羽市 木田久住一市長からあいさつをいただきました。

福岡次長からは、三重県の戦略計画である「みえ県民カビジョン」の紹介、農山漁村地域での雇用の場や所得機会の確保、生きがいくくりなどを進めるため、地域の豊かな資源を活用したグリーン・ツーリズムをはじめとする「いなかビジネス」の取組拡大を促進、第9回全国グリーン・ツーリズムネットワーク岐阜・三重大会の振り返りなどを述べました。



三重県農林水産部 福岡重栄次長

木田市長からは、鳥羽市には答志島をはじめとする4つの有人離島を含む島々やリアス式海岸がおりなす景観、豊かな海の幸、そこに生活する人情味豊かな人々、いろいろな観光施設がたくさんありますが、中でも、島独自の歴史や風習、食文化が根付き、風光明媚な自然景観や時折々の景色などの魅力をさらに高め、そしてこれからも大切に守り、後世に伝えていくため選定した「島遺産100選」について詳しく紹介がありました。



鳥羽市 木田久住一市長



会場(答志コミュニティアリーナ)



大会宣言(TIC 山本加奈子さん)

体験プログラム

①答志島路地裏案内

概要

『巨大迷路答志島。その鍵をとくのはあなた』をテーマに島の路地を散策して、島民とふれあい、漁村の生活文化を感じながら暮らすような旅をして、最後に参加者同士で話し合いをしました。

場所

体験：答志地区・和具地区／意見交換会・報告会：答志コミュニティアリーナ

参加者

34名

担当インストラクター

山本加奈子さん、橋本千春さん、山下光洋さん、中川健一さん

体験の様子

最初にインストラクター（山本加奈子さん）から、答志島の歴史や文化・風習などについての話がありました。その後、配布した資料（地図）を使って、路地裏案内のルートや注意事項などを説明しました。

参加者を4グループに分け、それぞれにインストラクターが1名ずつ付いて、グループごとに答志島の各地を散策しました。

その昔、島の代表者が神祭具の弊を振りながら魚見台に登ったと言われる「へーふり坂」、海の神である龍神を深く信仰していた神功皇后にゆかりがある美多羅志神社で見ることのできる「龍神さん」、お的衆と呼ばれる若者たちが布海苔と炭で書いたお的を担いで坂を駆け上がり、お的に矢を射る真似を合図に消し炭を奪い合う「八幡まつり」で獅子舞が行われる「じんじの舞台」などを回りました。



山本加奈子さんと中川健一さん



「へーふり坂」を登る参加者



美多羅志神社の「龍神さん」



八幡まつりの「じんじの舞台」

そのほかにも、漁村ならではの細い路地も散策し、八幡まつりで手に入れた消し炭で、一年の大漁や家内安全を祈願して各戸の戸板などに書く「丸八」、かじ屋をしていたじんじろうさんが作ったと言われるそれぞれに個性のあるリヤカーより小さい

4輪車の「ジンジロ車」、サザエの殻のように路地を進むとくるっと回って行き止まりになっている「サンデの底」なども見て回りました。



戸板に書かれた「丸八」



「ジンジロ車」



「サンデの底」

答志島の沿岸沿いも散策し、答志漁港の端にある「八幡神社」や漁港内にある「海女小屋」で現役の海女さんからお話を聞いたりしました。



「八幡神社」



「海女小屋」

意見交換会の様子

体験終了後、答志コミュニティアリーナに戻って、意見交換会を行いました。まず、答志島に来た事があるか確認したら、始めて来た方が半数以上でした。簡単な自己紹介の後、答志島のおもしろいことと改善すべきところを挙手で話してもらいました。



輪になったの意見交換会

(答志島のおもしろいこと)

- ・ 地域全体が顔見知り、コミュニティが形成されている。
- ・ 路地裏体験という発想が非常によい、自分のところでもやってみたい。
- ・ 携帯の写真等を利用したゲーム感覚のイベントも考えられる。
- ・ 島独特の文化がある。
- ・ 顔が見える「ガラスの島」、暮らすように旅をするというのにぴったり。
- ・ 多世代同居により生活を感じられる。
- ・ 子供たちを地域が育てている。
- ・ 空き家がないことに驚いた。
- ・ インストラクターの質が非常に高い。

(改善すべきところ)

- ・ 火事防火が心配なので、島ではくわえタバコを禁止にする。
- ・ 休憩、販売等のスペースがあるととっても楽しい。

- ・グリーン・ツーリズムと防災は切り離せないので津波対策が必要。
- ・海外の路地には花が多いので、島でも考えてみてはどうか。
- ・ただ歩くだけでなく、物を買ってもらうような仕組みが必要。

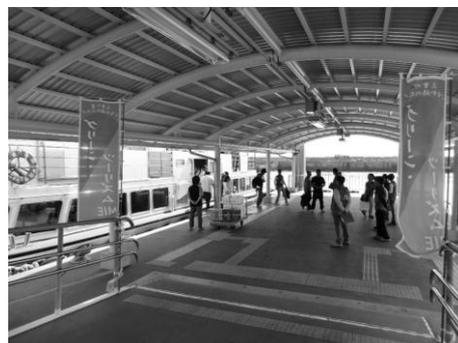
報告会の様子

- ・発表者：渡邊幸広さん（GTインストラクター5期生）
島には人と人の関わりの強さやおもてなしの心、独自の文化など素晴らしいものがいっぱいあります。高齢化、過疎化で悩む地域と比べると島は皆が豊かであり、課題が見えにくいのが課題ではないかという意見が出ました。また、お話しを聞いたところによると観光客が減っているとのことで、ずっと島で生活を続けていくためには、グリーン・ツーリズムを活かした収入を得る仕組みづくりが重要ではないかというようなまとめを発表していただきました。



発表する渡邊幸広さん

写真の紹介（受付から会場まで）



※鳥羽マリンターミナルから大会チャーター船により、答志島へ渡られた参加者は、会場を目指して島内を歩きました。

体験プログラム

②オリジナル漁具作成～海で生きるということ～

概要

『島人になる日』をテーマに、童心に還り、漁師さんになったつもりで作ったたった一つのオリジナル漁具で、実際に海で魚を釣り、最後に参加者同士で話し合いをしました。

場所

体験：答志地区白浜／意見交換会・報告会：答志コミュニティアリーナ

参加者

24名

担当インストラクター

中村泰久さん、濱口ちづるさん、橋本崇さん、中村友明さん、中村吉次さん

体験の様子

最初にインストラクター（中村友明さん）から、答志島の寝屋子制度についての話がありました。時代の変化に合わせて変わってきていて、外に出て行く若者もいるけれど島に戻るといつでも寝屋子の兄弟が待っていてくれるというのは、とても安心できるのだそうです。

参加者からも、「なぜここにしか残っていないのか?」、「女の人にもあるのか?」などの質問が出ていました。

その後、準備してあった竹、ペットボトル、ロープなどを使った漁具（釣具）の作成についての説明を受けました。

竹を用いた釣具のほか、竹を使わないロープとペットボトルで釣具を作成する人も。道具が完成したら、インストラクターに釣針をつけてもらって、近くの岸壁で釣ってみました。



インストラクターの中村友明さん



漁具の材料(竹など)



漁具の作成



作成した漁具での魚釣り

エサはムール貝のような貝を、足で割って身をつけるというもの。

釣り上げた人は、インストラクターに魚拓を取ってもらいました。動かないようにしてから、墨が乗りやすいように「ヌメリ」をふき取って墨を乗せ、ひれを広げて

形良く紙に写し取ります。



岸壁から魚を狙います



メバルを釣り上げた参加者



魚拓の作成

釣れた魚は、ベラ、メバル、タナゴ、フグなど。小さいフグが良く釣れました。5匹釣った人もいれば、ボウズだった人もいました。



作成した魚拓

意見交換会の様子

体験終了後、答志コミュニティアリーナに戻って、意見交換会を行いました。簡単な自己紹介の後、感想を挙手で話してもらいました。初めて行った体験メニューということもあって、こなれていない部分あり、改善点を指摘する意見が多く出ました。



輪になったの意見交換会

(参加者からの主な意見)

- ・ペットボトルやひもを使って作ると言う発想はなかった、新たな発見を感じた。
- ・最初に、「寝屋子」の話をしたのが良かった。若い人たちが育ったバックグラウンド文化を知ることが出来た。
- ・答志弁で話してもらっても良かった。
- ・サオとペットボトルで、どうしたらよいか悩んだ。もう少し具体的なアドバイスがあればと思った。
- ・「漁具づくり」ではなく、「釣竿づくり」の方が良かったかも？魚網を編むのかと思った。
- ・貝のエサを入れると逆に逃げていく魚も。違うエサがあっても良かったと感じた。

(インストラクターの主な意見)

- ・釣具が思ったより早く完成した。もっといろいろ相談しながら作っても良かったのではと思った。
- ・魚拓の出来が、魚によって違った。墨だけでなく、絵の具も用意してカラフルな魚拓でも良かったのではと思った。
- ・エサの種類がもっとあってもよかった。

- ・ネーミングについては悩んだが、結局そのまま進めてしまった。(ネーミングで誤解を受けたなどの) 指摘を受けて良かった。引っかかったところは、やっぱり大切な部分だったのだと思った。

報告会の様子

- ・発表者：小田和人さん（G Tインストラクター5期生）
 タイトルの付け方、体験プログラムの具体的な進め方、話し方、体験趣旨の伝え方などの面での改善のほか、ペットボトルなどを使うことでの発見や、やってると楽しかった、というような意見を発表してもらいました。



発表する小田和人さん

写真の紹介（交流会「旅館寿々波にて」）



※交流会には71名参加し、互いの活動を披露し合うなど、答志島の郷土料理をいただきながら交流を深めました。



市場見学

場所

答志集約市場

担当インストラクター

山本加奈子さん、橋本千春さん

市場見学の様子

全国でも7市場しかない、優良衛生品質管理市場に三重県第1号で認定された答志集約市場を見学しました。まず、インストラクター(山本加奈子さんと橋本千春さん)から、市場の説明があり、その後、各自で市場内を見学し、漁協の職員さんなどにお話しも聞きました。

残念ながら、この日は悪天候で水揚げが極端に少なかったのですが、一本釣りで漁獲されたサワラ、マダイ、マアジやカゴで漁獲されたタコ、ガザミなどを見ることができました。



市場前に集合した参加者



インストラクターによる説明



市場見学



タコの見学

写真の紹介 (昼食の「島むすび」)



※「島むすび」とはT I Cが考案した答志島の特産品を活かしたおにぎりで、サワラの味ごはん、海苔佃煮入、梅チリメン混ぜごはんの3種入り。

基調講演

講演者

熊本県人吉市 郷土の家庭料理「ひまわり亭」代表 本田節さん

演目

今そこにあるものが人をつなぎ、地域を活かす～地域資源を活かしたまちづくり～

基調講演の様子

地産地消“食”を地域資源とした拠点、郷土の家庭料理「ひまわり亭」代表の本田節さんの基調講演がありました。講演のポイントは以下のとおりでした。

- ・自分の住んでいる地域を PR (自慢) できることが大切。
- ・熊本県人吉球磨は、それぞれの地域が連携していることが一番の自慢。
- ・高齢化、過疎化などの様々な課題をグリーン・ツーリズムで解決している。
- ・ツーリズムビジネスの根幹は「食」業で、食を中心として10年後を見越した考えを持つことが大事。
- ・ひまわり亭はボランティアグループから平成10年に有限会社化して設立した。
- ・定年した60歳の新入社員採用制度や平日昼だけでイベント優先の子育て支援型の雇用を行い、地域と連携する仕組みをつくるコミュニティレストランとなっている。
- ・地域に関わりたいという思いが食につながった。(健康かつ安全のニーズ)
- ・人吉球磨だけでなく、九州では全体でグリーン・ツーリズムを推進している。
- ・農家民宿は単に体験するのではなく、心を耕すものである。
- ・常に向上心を持ち、自己投資にお金をかけている方はうまくいっている。
- ・人吉球磨では行政と距離を置き、行政主導にならないようにしている。
- ・自分のふるさとに誇りを持つことができれば、生き方が肯定されたと感じる。
- ・稼いだものを地域にフィードバックできる仕組みをつくとよい。
- ・農家民宿は1件では受け入れが難しいため、現在30軒が連携して150人の受け入れが可能となっている。
- ・人吉球磨のこれからの課題は、人材の育成と事務局機能の強化と考えている。
- ・グリーン・ツーリズムは単独の活動でなく、5K(高齢者問題、教育、環境、暮らしと観光、健康)が密接につながり、広い意味で捉えることが重要。
- ・ひまわり亭では、食べるだけでなく研修施設を設けるなど活動の幅を広げている。
- ・熊本では平成23年に全国大会を開催して、それを機に農家民宿が組織化し、レベルアップを図っている。大会を開催する意義を考えてほしい。自給力、創富力、地域内循環が人材力アップとネットワーク化につながる。



講演者の本田節さん



熱心に聞き入る参加者

パネルディスカッション

コーディネーター

東洋大学社会学部教授 青木 辰司さん

パネリスト

郷土の家庭料理「ひまわり亭」代表 本田 節さん

新潟県妙高市役所農林課 丸山 裕治さん

リバーサイド茶倉理事長 山本 齊さん

T I C代表 中村 泰久さん

テーマ

三重県のグリーン・ツーリズムを振り返り、今後を考える

パネルディスカッションの様子

東洋大学社会学部教授の青木辰司さんコーディネートののもと、「三重県のグリーン・ツーリズムを振り返り、今後を考える」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

パネリストについては、基調講演に引き続き、郷土の家庭料理「ひまわり亭」代表の本田節さん、妙高市役所農林課でグリーン・ツーリズムを担当している丸山裕治さん、リバーサイド茶倉理事長で第9回全国グリーン・ツーリズムネットワーク三重県大会実行委員長の山本齊さん、答志島のグリーン・ツーリズムインストラクター組織T I C代表の中村泰久さんが務めました。

まず、青木辰司さんから、グリーン・ツーリズムの概要とともに、グリーン・ツーリズムと観光業の違いを説明いただきました。中山間地域であればあるほど非日常性を提供できるので、グリーン・ツーリズムを行うには有利な土地条件であることも紹介いただきました。



コーディネーターの青木辰司さん



パネリストの皆さん

パネルディスカッションのポイントは以下のとおりでした。(敬称略)

青木：基調講演をいただいた本田節さんを除いた3名のパネリストに活動の紹介やグリーン・ツーリズムに対する思いなどを話してもらいます。

丸山：お金より大切なものがあることを教えてくれる農山漁村の貴重な暮らしを守っていききたい。また、自分が住む地域の魅力に気づくことは難しいため、地域内外での連携（他者の目線を取り入れること）が重要だと思っている。

山本：松阪牛と松阪茶の紹介と理事長を務めるリバーサイド茶倉の説明をした。第9回全国グリーン・ツーリズムネットワーク大会の5分科会を継続すると言ったがなかなか進んでいない。

中村：T I Cとはどんな組織なのか説明した。答志島の魅力をフェイスブックやブ

ログで広く情報発信している。答志島の住民に、観光に目を向けてもらいたい、知ってもらいたいと考えている。

青木：山本さんのグリーン・ツーリズムを始めたきっかけを教えてください。

山本：ないと思っていた資源が身近にあった。地元にあるもので体験プログラムを実施している。

青木：妙高市では、どのような体制でグリーン・ツーリズムを行っていますか。

丸山：広域連携や民間企業とのスムーズな連携など、行政の枠を越えた活動が可能な協議会を立ち上げ、都市農村交流を推進している。

青木：本田さんは三重県の取組について気付いたことがありますか。

本田：三重の里いなか旅のススメを見せていただいたが、三重県は点と点ではがんばっている。しかし、お互いを知っていないと感じた。掲載施設同士の交流を行うべき。顔と顔を合わせないとネットワーク化はできない。

青木：丸山さんはグリーン・ツーリズムをどのようなものだと考えますか。

丸山：グリーン・ツーリズムは体験よりも、心の交流であり、生き方を伝えることだと思う。例えるなら、体験は服装のようなもの。もちろん格好の良い服、地域独特の服があればよいが、中身が重要。

中村：答志島には寝屋子とほうばい（朋輩）がある。島の外に出ても戻れるという安心感がある。島は帰る場所である。人と人とのつながりが深い答志島から何かを発信していきたい。

青木：人とどうつながるかが大事。答志島の暮らしや文化をどのようにグリーン・ツーリズムに活かしていくかが大きな課題であろう。

丸山：グリーン・ツーリズムは観光ではないし、地域間競争によって疲弊することではない。みんなで農山漁村の価値を共有して行うもの。「自分の施設や地域だけよくなればよい」と思わずに、PRでも連携できたらいい。

青木：顔の見える関係が非常に重要ということですね。

本田：私が配布したパンフレットを見ていただくとテーマは人で、農家民宿の施設ではなく、そこにいる人をPRしている。重要な組織である地元の観光協会が変わることが重要。金に貪欲になると楽しくなくなる。

山本：皆さんの話を聞いて、ネットワークがないとうまく進まないことがわかってきた。三重県でもネットワークを作れたらよいと考えている。

青木：グリーン・ツーリズムはスモールビジネスなので、ネットワーク化していくことが望ましいので、ぜひ参考としてください。

(終了)



パネリストの丸山裕治さん

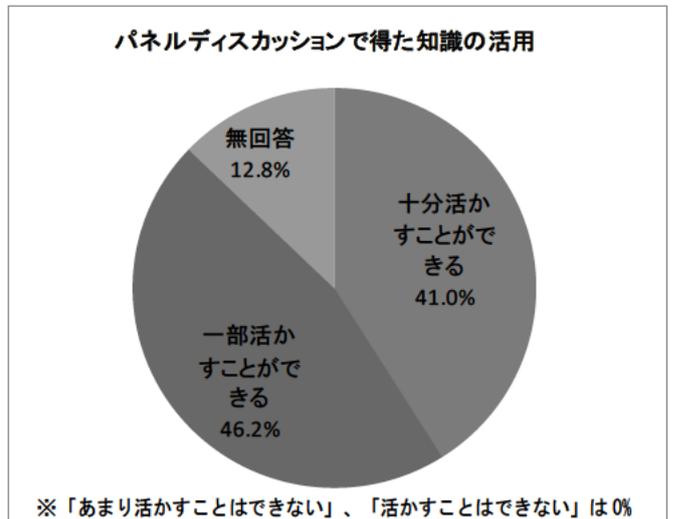
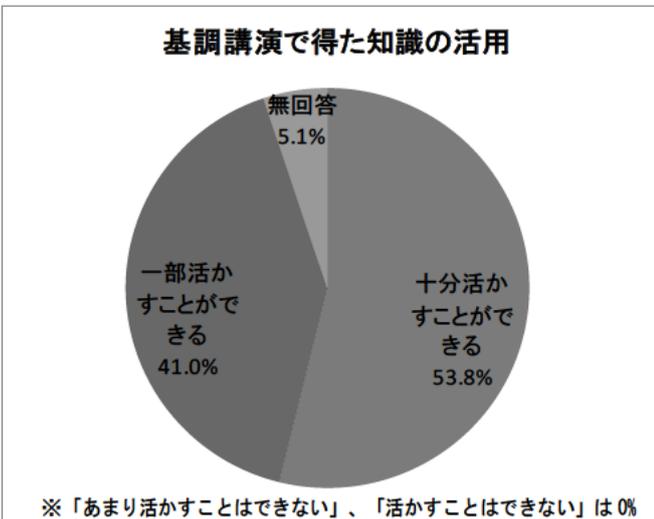
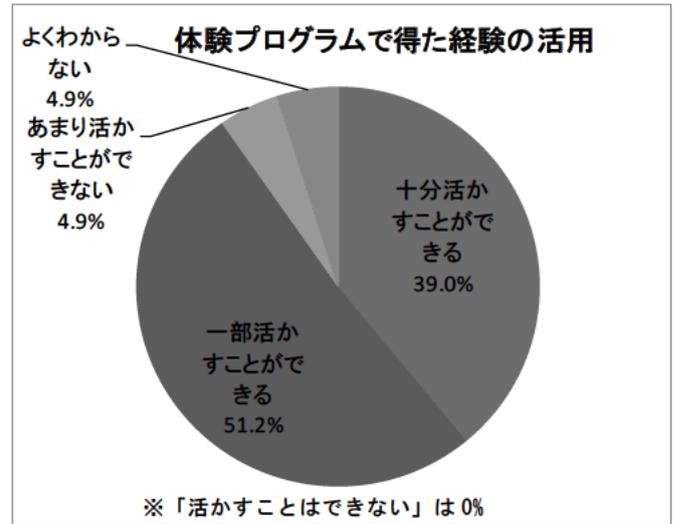
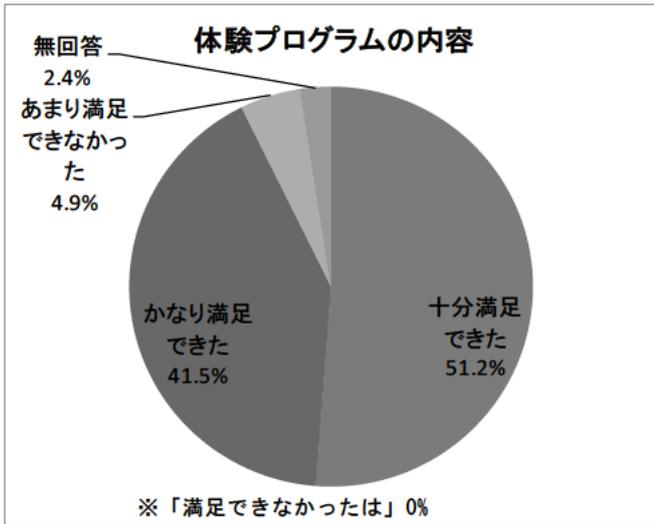


パネリストの山本齊さん



パネリストの中村泰久さん

第1回三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会アンケート結果



編集後記

この度、鳥羽市答志島において、第1回の三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会を開催させていただきましたが、TICを始めとする三重県グリーン・ツーリズム大会実行委員会の皆さまや鳥羽市を始めとする後援団体の皆さまのご協力により無事終える事ができました。この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

大会を終え、参加者の声としていただいたアンケート結果などから多くの課題も見えてきました。時間配分や資料の作り方という事務的なものから、もっと多様な参加者に参加してもらう工夫や参加者同士の交流機会を増やす事などの意見もいただきました。

第2回を開催するかどうかは現時点で決定しておりませんが、開催する事が決まった場合は、関係者においては運営の協力、グリーン・ツーリズムを実践される方においてはご参加いただくようよろしくお願いいたします。

三重県農林水産部農業基盤整備課